渡邊 FS 相談会報告
タイトル
科学とアートの融合による環境変動にレジリエントな在来知の再評価と未来集合知への展開
日時：2022 年 7 月 25 日（月）13 時から 15 時 10 分
形態：オンライン
参加者：大澤真幸・社会学者・思想家
吉見俊哉・東京大学（カルチュラルスタディーズ）
渡邊剛・プロジェクトリーダー
山崎敦子・サブリーダー
松田素二・プログラムディレクター

冒頭に資料に基づいて 30 分程度、プロジェクトリーダーからプロジェクトの目的や位置付け、それに目下の懸案事項などについて概括的説明があった。まずサンゴという存在が、生き物であると同時に、動物であると同時に、植物を取り込み、時代の経過とともに礁となるが、その全経過が人間の生活と密接に関連している特徴がある。その古サンゴの精密な年代測定によって、自然環境の変化や社会環境の変遷を辿ることもできる。このサンゴの特性をもとに、人間社会の変化と意識の変容を辿る方法として演劇的手法を活用して過去の再現と、研究者と住民の対等で双方向的なコミュニケーションを確立する。そのためにプロジェクトがこれまで展開してきた数多くの実績について報告がなされた。
これに対して、大澤さんの方からまず下記のコメントがあった。
古サンゴの精密な年代測定による過去の再現の素晴らしさは理解できたが、それをより明快で多くの人々が関心・興味を持つような大きな枠組みの中に位置づける作業が十分とは言えない。例えば、地球環境問題は、未来を想定するために決定的に重要であること、SDGs などの重要性も高まっていることは、メディアなどによって流通し人々に意識化されている。現代の問題を探り未来へのビジョンを持つには、過去をどのように認識し向き合うかという問題と分かち難く結びついている。さらにその過去への認識を、単なる知識や情報のレベルではなく、肌感覚を持って「自分ごと」とする思考が日本社会には欠けてきた。このプロジェクトは、未来を志向するために、過去を「肌感覚」を持って「自分ごと」として捉えるためのものである、というような。過去を今の自分の存在と結びつけ、それを未来へとつなげるための方法として演劇を採用するという位置付けも必要ではないか。
続いて吉見さんからは、まず 2 点の質問とコメントがなされた。
1　時間の記録装置、タイムマシーンとしてのサンゴという着眼点の素晴らしさが十分生かされていない。自分のような人文・社会系の研究者にとってはものすごく大きなインパクトがあるのはサンゴの持つこの特性である。従って数万年前から 100 年以内に及ぶ精密時間測定の機能があることをアピールするためには、100 年以内の人々の記憶とすり合わせる

だけではあまりにももったいないことで、人智の及ばない数万年前、あるいは縄文時代の数千年前の過去の環境変化や日常の精密な再現こそ必要ではないか。
２　人が経験するイベントの確率（津波や大雨、気候変化など）に従って想定されるイベントをタイムスケールの上に設定した際、その場面の内部に一瞬のうちに入り込むスキルが演劇であり、その演劇を介してその場面を再構成することができる。こうした演劇という方法がこのプロジェクトにおいて果たす役割を明示的に説明する必要がある。なぜ演劇か、という方法論の理論的提示が十分とは言えないのではないか？

以上のコメントへのリプライを踏まえて、第二ラウンドでは、大澤さんから、演劇の位置付けとして、歴史における「枢軸（ヤスパース）」を例に引きながら、自然災害から米軍統治の経験までの広範な歴史の画期の内部に入り組むことで、肌感覚としての過去を再構成することツールとしての意義を明確にした方が良いこと、また演劇のシーン（プレイ）は、あまりたくさん設定せずに二つのことなった時空の場面が良いのではという提案があった。吉見さんからは、サンゴの持つ圧倒的な意味を正面から主張し、演劇だけでなくアートを対象化して、しかもその圧倒的な意味とマッチするような質のものを選び出す作業が必要ではないかというコメントがなされた。

三陸地域における二つの事例、有明地域における二つの事例を通して、森–川–海の連関の視点から、現代社会がそれを切断したうえに社会や人々の分断をもたらしている現状に対して、それをつなぎ合わせることで地域社会の再生と環境の保全を図ることを目指すプロジェクトの方向と方法について報告があった。鍵となる視点として、「意図的な無関心層」に向き合うこと、正義や理念の対立を回避しながら共有できるシンボルやアイコンを設定しながら状況を変化させていく視点があげられた。これに対して、鬼頭さんから有明海沿岸調査の経験などに基づいて、以下３点の注文がなされた。

１　地域の人々の多様で錯綜した思いや意識を汲み取らないと、平板な対立図式にからみとられる。それを避けるためには、自然科学・工学的視点に加えて、地域に密着して半ばレジレント型の調査を行なっている曖昧で不定形な（綺麗に理論化されない）視点が必要で、そうした視点を持つ研究者を加える必要があるのではないか。
２　地域の現状を厚みを持って理解するためには、歴史軸、とりわけ明治以降の近代史の中で、地域、環境、生業がどのような変容をたどって今日の状況に至ったかという視点が必要なのではないか。
３　正義や理念の空中戦を回避してアクセスや記憶を共有できるアイコン（例えば干潟の生き物やうなぎ）を手がかりに、人々の意識を喚起していく際、現実の今日の生態系の中で、それが外部からの強力な（科学的・政治経済的）介入なしに実現できるかどうかの検討が十分ではなかったように思われる。

４　正義や理念を回避することは、ある面で、不毛な対立を固定化させ分断を深化させることを予防する効果はあるが、反面、これから先の地域のあるべき姿についての議論自体を封殺してしまうとしたら、ビジョンを持った未来を描けなくなるので、その辺りのバランスをどうとるのかについては仕掛けが必要ではないか。

つづいて、東北の調査経験をもとに帯谷さんから下記３点のコメントがなされました。
１　研究者が、例えば干潟の再生あるいは非大型構造物的自然統御など地元の生活環境、生態環境と密接に関わる事案に、提案や知識の提示あるいは対話などのアクションを通して関与するタイプの調査は、近年では超学際、社会実装として認知され、社会調査の領域でもアクション oriented リサーチ、介入型研究として位置付けられている。こうしたタイプの調査手法をどのように認識するかについては、誰のために行っているのか、どのような価値規範に基づいて行っているのか、対立する多様なステークホルダーとどのような関係を結ぶのか、など基本的に検討しておくべき課題があるので、それについての検討を行っておいたほうが良い（正解花井）。
２　プロジェクトのタイトルが「海と森のつなぎ直し」となっているが、東北の事例はその通りだが、有明海の事例では森の姿が前面に登場しないので、何らかの説明が必要ではないか
３　東北の二つの現場、有明の二つの現場をつないで、プロジェクト全体の統一した流れを作るためには、各事例をつなぐ論理があったほうがわかりやすいが、その点が十分主張されていない気がした。
４　鬼頭さんが指摘したように、各事例のコミュニティに入り込んでフィールド調査をしている社会学、民俗学、地理学、人類学などの研究者をチームに参加させることで、より視野の厚みが出るのではないか
　以上のコメントや注文に対して、横山さんからも補足的説明があり、率直な意見交換がつづいた。